

源氏物語

若い人への古典案内

秋山虔著



著者略歴

秋 山 虔 (あきやま けん)

1924年 岡山県に生る

1947年 東京大学文学部国文科卒業

《現 在》 東京大学文学部教授

《著 書》 「紫式部日記」(共著)
「源氏物語の世界」「源氏物語」他

《現住所》 東京都杉並区赤塚 5-25-6

〈お願い〉

☆現代教養文庫の定価は、すべてカバーに明記してあります。

☆万一、落丁乱丁の場合は、直接小社にお送りくだされば早速
お取替します。

© Ken Akiyama 1971

Printed in Japan

現代教養文庫 731 源 氏 物 語

1971年 9月 30日 初版第1刷発行

1984年 1月 30日 初版第33刷発行

著 者 秋 山 虔

発 行 者 小森田 一 記



発行所 株式会社 社会思想社

(113) 東京都文京区本郷1の25の21

電話代表 (03) 813-8101

振替東京 6-71812

現代教養文庫

731

源氏物語

—若い人への古典案内—

秋山 虔 著

まえがき

本書は、質量ともに日本の古典を代表するにとどまらず、世界の古典として迎えられている『源氏物語』の真髄を、いささかなりとも伝えようとしたものである。多岐にして複雑、高雅にして大部の作品を、文庫本一冊にその全容を盛ることは至難のわざである。よって本書では次の点に焦点をおいた。

一、必ずしも巻序に従わず、自由に物語を再構成した。したがって割愛するにしのびない巻々をも、思いきって整理し統合した。ことにこの物語の第二部（解説二六六頁参照）については、ほとんど筆を及ぼすことができなかったのは残念であるが、紙面の余裕がなくやむを得ないことであった。

一、物語がダイジェスト的になることを避け、各章に独自のニュアンスを持たせた。

一、訳文は原作のイメージを損わず、しかも登場人物の性格・心理・事件の葛藤等、興味あるよう配慮したつもりである。本書を通じ、『源氏物語』の偉大さの像に一步なりとも近づき得ていれば幸いである。

なお、本書が成るについては年来の畏友宮本正義氏の援助を受けたものであることを特記した

目次

はしがき

一 苦悩への序章……………九

1 桐壺更衣……………一〇

2 光る君……………二四

3 藤壺女御……………二六

4 雨夜の品定め……………三三

5 夕顔Ⅰ……………四四

6 夕顔Ⅱ……………五三

二 藤壺と若紫の君……………六三

1 北山の春……………六四

2	若紫の君Ⅰ	六九
3	若紫の君Ⅱ	七四
4	藤壺出産と源氏の苦悩	八二
5	朧月夜の君	八八

三	別離と衰運	九三
---	-------	----

1	葵の上と六条御息所	九四
2	葵の上の死	一〇一
3	六条御息所との別れ	一〇四
4	桐壺院崩御と藤壺の出家	一〇八

四	須磨の浦波	一一九
---	-------	-----

1	須磨流謫	一二〇
2	都恋しのわび住まい	一二六
3	暴風雨	一三三
4	明石の入道	一三八
5	明石の君との契り	一四三
6	源氏帰洛と明石の姫君の誕生	一五三

7	明石の姫君の養育……………	一六〇
---	---------------	-----

五	栄華への道……………	一六三
---	------------	-----

1	藤壺の死と帝出生の秘事……………	一六四
2	夕霧と雲井の雁……………	一六六
3	内大臣の焦躁……………	一七四

六	玉鬘と源氏の晩年……………	一八一
---	---------------	-----

1	不知火の玉鬘……………	一八二
2	初瀬詣で……………	一九〇
3	六条院の花形……………	一九七
4	父内大臣との対面……………	一九九
5	夕霧の結婚……………	二〇三
6	紫の上の死……………	二〇四

七	宇治十帖……………	二〇九
---	-----------	-----

1	匂う兵部卿・薫る中将……………	二一〇
2	宇治の山荘……………	二二二

3	八の宮の死	二八
4	大君と中君	三五
5	浮舟Ⅰ	二四六
6	浮舟Ⅱ	二四五
7	横川僧都	二五〇
8	夢の浮橋	二五四
	解説	二六一
一	はじめに	二六二
二	源氏物語の構成	二六四
三	源氏物語の源流	二七〇
四	源氏物語の作者	二七七

一
苦悩への序章

1 桐壺更衣

ある帝^{みかど}の御代のことである。宮中では、きょうもどこかの局^{つぼね}で、女房^{にようばう}たちの私語がかわされていた。

「なんだか、くさくさするではありませんか。お天氣のせいかしら……。あの、桐壺^{きりつぼ}にいられる方が、どうも氣になるせいでしょう。」

「あのお方は、亡くなられたお父様は大納言^{だいなげん}だったというけれど、今では後見^{うしろみ}もない身の上でしょう。それなのに、あの權勢ぶりだったらどうなの。」

「あんなのを、玉の興^きっていいのですね。」

際限もなくつづく女房たちの私語は、桐壺更衣^{きりつぼのうしろみ}に対する惡意に満ちていた。桐壺というのは、女御とか更衣とか呼ばれる帝の夫人たちのひしめく後宮の多くの御殿のなかで、帝のご座所^{ざせ}の清涼殿^{りようだん}からは最も遠い東北の隅にあった。中庭に桐が植えられてあることにその名の由来があるこの殿舎に、更衣は靜かに身を寄せていたのである。

「父上さえご健在だったならば……。」という思いが、桐壺更衣の腦裏を、ふとよぎることもあ

った。身分自慢のあのお方、時めく権勢と富で、美々しく飾られたあのお方、美しさと教養と才能で宮廷を圧倒されようとするあのお方、といった他の女御や更衣たちの生活を見るにつけ聞かにつけ、桐壺更衣は身も細る思いのするのを、いかんともしがたいのである。しかし静かにひっそりと、誰からもとやかく言われることなく、宮仕えの任を果そうとすればするほど、帝寵はいやまさりにまさるのであった。

「木枯しに吹き曝された木の葉のように、頼りない身だけれど、私はひたすら、帝の愛にお縋りするより生きる道はないのだ。」

桐壺更衣の帝に寄せるひたぶるの心情が、帝をさらに慕わしく思う気持ちに駆りたてるのもあった。帝も、桐壺更衣をいとおしむ思いが周囲の非難を受けていることをご存じないわけではないが、この一途の胸の内を制する術はないのだった。あの、美しさと教養にたけ、節度と品位を保ち、しかも確固とした後見人を持たないというだけで、他の女御たちのように競う心をおし鎮め、ひそやかに息づいている女。あわれである。懐かしい女である。帝は、いかにも、桐壺更衣と語らう時の短かさを歎かずにはいられない。

帝のこうした心情は、微妙に後宮内に伝わっていく。他の女御更衣たちの感情が、日増しに桐壺更衣を冷たくおしつづむのは、自然の成り行きであった。初め蔑視していた感情は、帝の愛を独占した女に対して、逆風に煽られでもしたように嫉妬と憎しみの炎と化した。はかばかしい後見を持たぬ浮き草のような者が、帝寵を一身に集めるなどということがありえようか。しかし、事実として、それは存在したのである。有り得べからざることが存在したのである。宮廷内では、

互いに身分をわきまえ、互いに牽制し合うことで秩序が保たれてきたし、今後とも保たれるはずのものであった。その常識を破ったのは、そして帝寵を独占してはばからぬのは、かの桐壺更衣その人だ。

いつ、誰がそうしたのかはわからぬ。桐壺更衣はある夜ふけ、帝に召されて長い廊下を渡って行った。ふと気づくと、何か汚らしいものがその道筋に撒き散らしてあるではないか。またある時は、歩みゆく廊下の両端の扉に、いつのまにか錠が鎖されてあったりする。

「ほんとにお気の毒なこと。きっと、道筋を間違われたのね。」

「遙々と、東北の隅からお出でになって、道に迷われるなんて。」

御簾の中で、ひそひそと女房たちの私語くのを、桐壺更衣はじっと耐えた。更衣はしだいに彼女の悪意に馴れた。あとはただ、じっと耐えるだけ。耐えるという以外に、桐壺更衣には、もう何も残されていないのだ。帝の愛を受けるということ、帝を愛するということ。その行為がいかに重く厳しいものであるか。ふと、弱くなる心のうちを、またしても「父の大納言さえ、ご在世ならば……」と、愚痴どもつかぬものが、切実な思いとなってくる。

愛するものは、愛の故に、相手の微妙な心の揺れに敏感なものだ。帝は、苦しそうな更衣のために、特別にご自分のお側近く、後涼殿に控えの局をお授けになったのだが、そこに上局を賜わのさえ異例な上に、もともとから局を持っておられた他の更衣をほかへお移しになられてのことであつたから、追われた者はもとより、桐壺更衣に対する周囲の反感嫉視は、とどめようもないのだった。「唐の玄宗皇帝は、楊貴妃への愛に溺れ、そのために安祿山の大乱を招いたというでは

ないか。」「殷鑑いんかん遠とほからず、ですよ。」

御方みかた々の恨みつらみは、いつ知らず公卿きやうきやうや殿上人たちの間でも、政治問題として話題にのぼるようになった。今まで親しみをみせ、同情的であった者も、ついと目をそらすようになった。更衣には、それらのことが身を切られるように辛かった。とかく床に臥ふせりがちの日々が続くようになったのは、それから間もなくのことである。更衣は日に日に衰えゆく肉体をいとおしんだ。肉体が衰え始めると、精神もまた、急速に生きる張りを失っていくようにならない。更衣は里邸にたがって休養する日が多くなった。

「帝のご情愛ひとすじにお縋すがりしてきた私だけけど、こののち、果たしてどうなってゆく身の上なのやら……」

宮廷での周囲の冷たい目を思い出す度に、更衣の心は沈んでいく。しかし、さすがに里邸にいと、身体は生氣を取り戻してくるよう思われる。そして帝のお側近くにいない自分は、本当の自分ではないような気持ちにもなるのであった。帝のほうでも、

「更衣の健康はまだすげれないのか。一日も早く帰るように。」との、矢のご催促。広い宮中に、そこだけポッカリ空洞のできたような淋しさが、帝をいつになくご不興にかりたりする。このことがまた、御方々の憎しみの火に油を注ぐことにもなった。

「天下の乱れるはじめともならなければいいのだが。」帝の側近く仕える公卿殿上人たちの心配は、すでにこの状態を杞憂きゆうとして軽く考えるものは誰ひとりいなくなった。あまつさえ、風情あるお催しの度に、誰憚はばることなく更衣をおそばにお引き寄せになるし、ある時には夜の衾ふすまをと

にされた翌日もそのまま引きつづきお側にとどめおかれるということになると、人々の憂いは現実のものとならざるを得なかった。

前世からの浅からぬ因縁というのであるとか、この美しくつつましやかな更衣に、世にまたとない、玉のように清らかな皇子までがお生まれになった。

「一刻も早う、若宮の顔を見て安心したいもの。」と、帝は里邸に下がっているその母と皇子をお召し寄せになると、たぐいしない美しさに思わず目を瞠みはった。よろこびの涙を、そっと袖で拭われるのもあった。

ところで、帝には当時、右大臣のむすめでもっとも早く入内し、後宮を威圧していた弘徽殿女御の腹に、第一皇子がもうけられていた。弘徽殿女御は、今を時めく右大臣の姫君である。右大臣は世の重しとして、権勢ならぶ者なく、その七光ななひかりは弘徽殿においてもっとも發揮もよほされていた。誰もが、第一皇子を東宮と考え疑う者はなかった。帝自身、この皇子を儲君もろぎみとして愛されることひととおりでなかったのだが、桐壺更衣腹の新皇子を見つめる時の目差まなざしには、ひとりの父親としての愛情以上の、何か重大な思いがこめられているのだった。帝はあわてて、つと目をそらされることもあった。

帝のそんな気配を、いち早く感じ取ったのは、何といっても弘徽殿女御その人であった。

「あの若宮の誕生後というものの、度重なる夜離よがれが続くところを見ると、あるいは――。」という悪い予感がするのである。

「それに、帝は以前ほどには親しみの情をお示しにならない。第一皇子や皇女たちの生母である

この私を、煩わしくお思いなのだろうか。」

弘徽殿女御の不安は、黒い雲が大空をみるみるうちに蔽おほってしまふように、拡がっていく。

「あの第二皇子が、ついには第一皇子をさしおいて、皇太子の位を奪うばってしまふのではなからうか。そんなことはあり得ないことだけれど、今の帝の御様子では……」と、日毎ひごとに疑心は募もっていくふうだった。

新皇子は、すこやかに育そだっていった。周囲の波風も、疑惑や苦しみも、そこだけは避よこけているかのように。そして世の中の光という光が、そこにだけ集まっているかのように。

新皇子は早くも三歳。御袴着おんはかまぎの儀式が催された。帝は万事控えめに事を運はべたのだったが、それでも内蔵寮くらつかさや納殿おさめどのの財物のありったけを用いられるという結果となった。世間の非難は、またしても更衣へと集まった。

「このままでいくと、いづれ思わしくない事態にさし至るぞ。それがわかりでない帝でもないのに。あの弱々しく、不安げな更衣に、帝をとりこにするどんな魅力があるのだろうか。」

「それにしても、若宮の世にも類ない美しさ。あどけなく笑いかけられる時の、あのお顔おもてったら。」

「あのように美しいお方も、この世にはいらっしゃるのだ。」

ある者は自分の目をおし拭ぬぐい、思わず賛嘆の声を放はなつ者も多かった。

その年の夏のことである。

更衣は、緑の葉を照り返す夏の陽射ひさしを遠く眺めながら、どこか身体の奥底から毀やぶれてゆくよ